

近世後期における解剖学の養生論的展開

——腹の内覗きと腹の内巡り——

Anatomy and Personal Health Care in the latter part of Edo era:

Gaze on and Tour around the Inside of Human Body

片 渕 美穂子

Mihoko KATAFUCHI

(保健体育教室)

2018年10月26日受理

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the view of the body which anatomy brought about in the common phases in the latter part of the Edo era, especially the view of the inside of which anatomy and personal health care are related, focusing on illustrated comic books. The main works were Taki Yasumoto (Rankei) "Kotobukigusa" (1789-1801), Jippensha Ikku "Haranouchi Yojo Shuron" (1799), Kashikoan "Haranouchi Nozoki Karakuri" (1826), and Fukunaga Yoshitomo "Shintai Eisei Daiichi no Kokoroe" (1885). Taki Yasumoto "Kotobukigusa" is a work expressing a passive attitude towards the anatomy that the anatomical knowledge is not useful for the personal health care. "Haranouchi Yojo Shuron" and "Haranouchi Nozoki Karakuri" don't deal with the anatomy but describe the drama of peoples compared to the internal organs. "Shintai Eisei Daiichi no Kokoroe" positively evaluated anatomical knowledge and explained the body comparing it to the political system of modern Japan. The development of the story of going around the inner body reflected the desire to see the inside and the popularity of the trip.

緒言

本稿の目的は、近世後期において解剖学が通俗的な位相でもたらした体内観、特に解剖と養生とが関係づけられた体内観を、絵入り読み物から明らかにしようとするものである。日本で最初に翻訳された西洋解剖書は、天和二(一七七四)年頃に Johann Remmelin, *Pinax microcosmographicus*(レメリン『小宇宙』)を訳したものとして推定されているが、最初の訳本が存在せず出版もされていない¹。杉田玄白が小塚原の女刑の腑分けに参加してクルムスのターヘルアナトミアの正確さに驚き翻訳した十八世紀後半の『解体新書』は、医学のみならず様々な分野に衝撃を与えた。『解体新書』以前すでに山脇東洋は、宝暦四(一七五四)年京都にて腑分けを実施し、五年後の宝暦九(一七五九)年、誤解を含み簡略なものではあるがその結果を『蔵志』として出している。山脇東洋の京都での腑分け以後、杉田玄白の江戸小塚原での腑分け参加までの間に、六回の腑分けが萩、伏見などにて行われている²。近世後期において、身体内部を開き覗き見る解剖学的な視線が、医学という分野以外でどのように展開されたのかに関しては、すでにタイモン・スクリーチ(Timon Screech)、高山宏、酒井シズ、白杉悦雄らの研究がある³。特に、錦絵「飲食養生鑑」と錦絵「房事養生鑑」⁴は、近世後期の医学上の通俗的な身体観を示すものと

して取り上げられてきた。タイモン・スクリーチ『江戸の身体を開く』は、近世において身体を開くということの現象を生じさせた知覚のありようを、錦絵「飲食養生鑑」及び「房事養生鑑」他、多数の視覚的資料を取り上げて示した⁵。スクリーチは続く『大江戸視覚革命』において、近世における「体内を覗く」という知的好奇心の生成を描き出している⁶。白杉悦雄は、スクリーチの研究を参考にしながら、「飲食養生鑑」及び「房事養生鑑」を、「江戸庶民が抱いていた体内イメージについて物語る貴重な画像資料」⁷として取り上げている。近世後期における解剖学がもたらした通俗的な体内観、特に養生と関係づけられた体内観の解明のために役立つ資料は、錦絵「飲食養生鑑」及び「房事養生鑑」だけではない。大衆的な絵入り小説である草双紙もまたそうである。実際、『解体新書』の刊行以後、「腹の内」「腹中」「胸中」をタイトルの一部とするものや、体内や身体への関心が伺える草双紙(特に黄表紙、合巻)が登場している。筆者が確認しえたものは次ぎの通りである。山東京伝『人間一生胸算用』(寛政三)、恋川春町『腹京食物合戦』(安永八)、三蝶戯作『腹中掃除五臓夢』(天明六)、芝全交『十四傾城腹之内』(寛政五)、式亭三馬『人間一心視替繰』(寛政六)、山東京伝『人心鏡写絵』(寛政八)、十返舎一九『腹内養生主論』(寛政九)、山東京伝『仮名手本胸之鏡』(寛政

十一)、山東京伝『五体和合談』(寛政十一)、曲亭馬琴『胴人形肢体機関』(寛政十二)、山東京伝『分解道胸中雙六』(享和三)、式亭三馬『早替胸のからくり』(文化七)、式亭三馬『腹之内戯作種本』(文化八)、式亭三馬『人心視機関』(文化十一)、山東京伝『腹中名所図絵』(文政元)、かしこ庵『腹内窺機関』(文政九)。

ここで養生論について確認しておこう。十七世紀中頃以降、出版技術の進展も相まって、養生書と呼ばれる安寧な生活と長寿を願う養生に関する書物が出回った。その内容は、飲食、起居、房事、「養育法、養老法、簡単な治療法、鍼灸の注意事項や医師の選択法、心のもちようなど、多岐にわたっており、道徳的な語りの中で記述されていた。こうした養生に関する記述はまとめて養生論と言われる。養生論の内容は、その性格上専門的な医学の知識が詳細に述べられているわけではないが、五臓六腑、陰陽、気・血・津液といった概念的枠組みを踏襲していた。養生に関する記述は、家訓や心学書などにも含まれることがあった。元来、養生論が専門家向けではない平易な言葉で語られることが多く、養生のテーマは医学と通俗道徳とを架橋するような内容であった。

本稿で主に取り上げるのは、多紀安元(藍溪)『巨富古貴草』(寛政年間)、十返舎一九(作・画)『腹内養生論』(寛政十一)、かしこ庵〔他)『腹内窺機関』(文政九)、山東京山『無病長命養生手引草』(安政五)、福永美智『身体衛生第一の心得』(明治十八)である。第一節では、解剖学によりもたらされた、十八世紀後半以降の体内への関心を反映した絵入り読み物の動向を概観する。第二節では、解剖を知ったところで養生とは関係ないと暗示する、多紀安元(藍溪)『巨富古貴草』における体内観を明らかにする。第三節では黄表紙である十返舎一九(作・画)『腹内養生論』(寛政十一)、かしこ庵『腹内窺機関』(文政九)を中心に考察する。この二作品は、養生を主題とし腹の内の人に見立てられた臓腑のドラマが展開されている。第四節では、解剖学を受けて生じた通俗的体内観の明治期以降の展開の一例を示している福永美智編『身体衛生第一の心得』(明治十八)を取り上げる。

1 腹の内を覗く、腹の内を巡る

解剖は、生物の体を切り開き、その形態・構造や病因・死因などを調べることである。それは、外から見えない内側を明るみに出すものである。『解体新書』の刊行によって引き起こされた、内なるものを観るという感覚は黄表紙のテーマとして、胸の内、腹の内、心の葛藤、建て前とは違う本音、臓腑に見立てられた人々の人間模様などを登場させた。本稿で取り上げた以外で主要なものを紹介しておこう。山東京伝『人間一生胸算用』(寛政三)。作者京伝が善魂に誘われるまま小人に変わり、東隣に住む律儀者である無名屋無次郎の

体内に入る。そこでは心が主人、目・口・鼻・耳・手・足が使用人となっている。恋川春町『腹京食物合戦』(安永八)。過食と美食を繰り返す男の腹の内部での、人に見立てられた食物、臓腑のドラマが描かれ、武士に見立てられた西瓜・薩摩芋が、同じく武士に見立てられた反魂丹・和中散と戦うことになる。式亭三馬『人間一心視替繰』。馬二郎が腹明鏡で腹の中を覗いて人の心の有り様を穿つという内容である。芝全交『十四傾城腹之内』。傾城の「腹之内」、つまりは遊女の心の動きと臓腑の機能を、人に見立てられた臓腑の会話のやりとりで示す。式亭三馬『人心視からくり』五人の人物の行動とその本心を表と裏から弁じてみたもの。山東京伝『腹中名所図会』(文政元)。主人公半道庵うたた寝中、本草書から神農が現れ大黃を供に連れ、人間の腹の中にある様々の名所を訪れる、というもの。

黄表紙は草双紙の一つで江戸時代中期以後多く出版されたで大人向きの絵入り小説のことを言う。黄表紙の中でこれら身体、胸の内、腹の内といった、心の葛藤、建て前とは違う本音、臓腑に見立てられた人々の人間模様を扱うこれらの黄表紙の割合がどれくらいなのかは分からない。言えることは、常識的には可視化できない、胸の内、腹の内、体の内部、心の葛藤、建て前とは違う本音、というものが、黄表紙の特性と合致していたということである。というのは、「黄表紙のおもしろさは、…理屈を超えた空想が約束する滑稽であり、この態度からしばしば夢や未来期という構想を援用する。非現実的な趣向や構想や絵が会話と結びつく」⁸⁾のである。そして、この黄表紙の成立時期(恋川春町『金々先生栄花夢』刊)とされる安政四年は、杉田玄白『解体新書』が刊行された時期でもある。本来漢方医学の五臓六腑の概念は心理的な作用をも含んでおり、言うまでもなく「腹の内」とは「心の内」である。「心の内」は時として生活の雑事や人間関係を思い悩んでいるのである。

胸の内、腹の内、心の葛藤、建て前とは違う本音など、これらは通常眼に見えるものではないし、もちろん臓腑もそうである。おそらくはそのため、体内へ入り臓腑の有り様を明らかにすることは、夢の中の出来事として展開されることが多かった。本稿で取り上げる多紀安元(藍溪)『巨富古貴草』、十返舎一九『腹内養生論』、かしこ庵『腹内窺機関』、そして『身体衛生第一の心得』も夢の中で体内を巡るという筋立てになっている。先にあげた黄表紙は、そのタイトルに「機関」「覗」とつく場合も少なくない。黄表紙には図画は不可欠である。ところで、レンズを通じて見えないものを見えるようにする機器が望遠鏡であるが、黄表紙の時期である天明から寛政年間前後に、浮世絵においても望遠鏡独特の視野が意識的に画面に登場し始める⁹⁾。この時期に見えないもの、隠れているものを見出すという欲望が高まったと思われる。先にあげた黄表紙の

作品がその現れであろう。近世から近代の視覚文化の歴史的展開を明らかにしている板坂によると、十七世紀後半にレンズが出回りはじめ、くのぞきからくり>として「極楽箱」が一般的に普及していったという¹⁰。その後、一七四〇年代は浮絵風に描かれた風景を覗かせるくのぞきからくり>一列が生まれていったと考えられ、また、十八世紀後半のくのぞきからくり>は「阿蘭陀」をルーツとして名のようになる¹¹。近世において解剖学は蘭学の一つだったことを考えると、「からくり」「機関」の言葉が、身体内部を覗かせた解剖や「阿蘭陀」を想起させたと予想される。実際、第三節で取り上げる『腹内窺機関』の表紙は、女の腹の内を「のぞきからくり」で別の女が見ている構図である(図1)。



図1 『腹内窺機関』表紙(国立国会図書館)

腹の内が視覚化される時、それが地理空間に見立てられ、さらに旅のテーマとも結びつく場合もある。多紀安元(藍溪)『巨富古貴草』、山東京伝『分解道胸中雙六』、山東京伝『腹中名所図絵』、かしこ庵『腹内窺機関』は体内を旅するという筋書きであり、錦絵「飲食養生鑑」及び「房事養生鑑」、山東京山『無病長命養生手引草』、福永美智『身体衛生第一の心得』では、体内は一都市であり地理的空間である。古代中国の医書に範を求める漢方医学においては、人をマクロコスモスに対するミクロコスモスとして捉える。そのため、例えば、経穴の名前には、気海、天、海、谷、泉、外丘、池など地理的空間の名称、門など建物の名称が使用される。そういう意味では体内が地理的空間にたとえられることは、不自然ではない。ただし近世後期において、養生について語られる時、身体に宇宙性を見するという発想はあまりなく、体内がたとえられる地理的空間は社会的な生活が営まれ統治システムが機能している一都市、一国である。そして、体内の臓腑を探ることが一都市、一国を旅することにたとえられる。旅というテーマと地理的空間に見立てられる体内と結びつくことは、おそらくは実際の旅の流行を反映している。例えば、高橋陽一は近世に奥羽から上方に向かった旅

行者の日記を網羅的に収集した一二九点の年代別分布を整理しているが、それによると、初出が一七世紀末、その後一七五〇年代までは十年に一冊足らずだが、一七六〇年以降一八三〇年代までは五冊から十冊、それが一八四〇年代、一八五〇年代は二五冊になっている¹²。旅の日記がそれまでとは違って多くなった時期に、旅のテーマと結びついた腹の内を視覚化が登場する黄表紙が出ている。明治期に入って刊行され、漢方医学ではなく西洋医学に基づく衛生の知識を紹介する福永美智『身体衛生第一の心得』であれ、体内という近代的な政治システムにより運営される一国を巡っていくという趣向になっており、体内という地理空間を旅するという図式が使用されている。

2 腹中と養生の非関係性—多紀安元(藍溪)『巨富古貴草』—

作者である多紀安元は、代々幕府の医官を勤めた多紀家の当主であるが、藍溪の別称で記したのがこの『巨富古貴草』である¹³。『巨富古貴草』の執筆時期や刊行年は、寛政年間(一七八九～一八〇一)という以上明確ではない。前述したようにこの時期には、『解体新書』(一七七五)の刊行以来の体内に対する関心が、医家たちに限らず起こっていた。話のあらましは次の通りである。富者である安在何某は、床の中で不老長寿の霊薬はないものかと考えながらそのまま寝てしまうと、掛け軸に描かれた仏郎機國で制作された「りゆくとすろうふ」という風車が掛け軸から出てきて、それに乗って不老長寿の霊剤を求めて旅をする。色欲に溺れている「女人国」と酒に溺れている「大酒国」に立ち寄った後「龍伯国」に到着し、そこに住む巨人の欠伸の拍子に巨人の口に入り呑み込まれてしまう。

体内の構造を探るという意味では解剖学的な志向を思わせるが、実際は逆に、解剖学的な知識は養生には役に立たないと、解剖学へ消極的な態度を表明している作品である。幕府の医官であり漢方医の彼からすればそうなるのだろう。これよりすでに三〇～四〇年ほど前、解剖学への否定的な見解を真正面から行ったのが、漢方医佐野安貞である。日本初の人体解剖観察書とされるのが、山脇東洋『蔵志』(宝暦九)であり、これは宝暦四(一七五四)年に京都で腑分けを行いその結果を五年後に著したものである。『蔵志』刊行後の翌年、佐野安貞はそのタイトル通り『蔵志』に真っ向から否定する『非蔵志』(宝暦十)を著した。安貞は次のように述べている。

夫れ蔵之蔵を爲は形象之謂に非ず、神気を蔵すを以て也、神去り気散の蔵只虚器。何を以て視聴言動の其の随う所を知る。又何を以て榮衛三焦之統紀を見ん。¹⁴

蔵志五臓五色五味之活法を廃し、其の所見を以て海内

の医学を一新せんこと亦難かな。¹⁵

神気が去り気の散じた死体の臓腑は虚ろな器にすぎない、何から視聴言動の機序を知るのか、また何から榮氣と衛氣、三焦の働きを見るのか。『蔵志』は五臓五色五味の活法を廃している、その所見をもって医学を一新するのは難しい。このように安貞は喝破している。安貞のような正面きっての批判ではないが、多紀安元(藍溪)『巨登富貴草』も「体内の機関」を知っても、結局は従来の養生のあり方には影響を与えないと、論しているようである。事実、修身齊家的な通俗道徳を語ることの多かった養生論にとって、解剖学は直接的知識とはなりにくい。杉田玄白は晩年に子孫に向けて、養生に関する七つの戒めを記した『養生七不可』(享和元年跋)を出しているが、その中に解剖学を反映したと思われる項目は特になく、従来の心の持ちよう、飲食や房事の戒め、過度の安逸の戒めが内容となっている¹⁶。

この『古登富貴草』にも旅の中で体内へ入っていくという、旅と体内を見ることの結びつきがある。スクリーチが指摘しているように、十八世紀末「名所図会」という通俗地理誌の刊行が非常に盛んであったことや、さらには近世における旅の隆盛が背景としてあるだろう¹⁷。先にふれた山東京伝『腹内名所図会』は、まさに腹の内の名所をめぐるという内容である。言えることは、体内を地理空間と捉えることが、この時期の解剖学の体内を見るという行為に繋げられ觀念されたということである。ここでも、体内は一国あるいは一都市であり、体内は地理的な空間である。多紀安元(藍溪)『巨登富貴草』は、医家が庶民向けに書いた実用的な養生書とは趣が違い、内容は奇想天外な絵入り読み物である。主人公安在何某が「りゆくとしろうふ」で到着するのは、まず「上天子より下庶人にいたるまで盡く色慾に溺るゝをむねとしたる習俗なり」¹⁸とされる「女人國」である。主人公は、房事にふける「女人國」のありさまを、多くの草花を愛で水をやりすぎて井戸の水をからしてしまうことに喩える。

千草萬木一つとして捨てき花は一種もなく、あなたこなたの花にあこがれ昼夜花壇を立さらず、承露に水を湛ては何れの花にも濯ぐゆへ…水は一つの井戸なれば対に渴水の期に至る¹⁹。

五行理論を適用した漢方医学では、肝・心・脾・肺・腎の五臓はそれぞれ五行の木・火・土・金・水に対応している。五臓は個別の臓器ではなく機能として把握され、その中で腎は水分調節及び発育と老化及び生殖に関わるものとされ、心は精神的活動に関するもの、血氣に脈を与えるものとされる。「多くの花に水をやって使い果たす」というたとえは、つまりは「多くの花＝

女に、腎＝水を使い果たす」ということであり、この五臓六腑観から導き出されている。安在何某は「女人國」の人々の有様をみて、腎の水が涸渇し心火が強くなりすぎて「陰虛火動の病となり彼早魘の時野山の草木骨蒸勞熱を發し、百般の難病蜂のごとく」²⁰なるだろうと考える。次に到着するのは「此國の風俗は我身の末をも打ち忘れ、常に酒宴をなすゆゑに大酒國と名付けられた」²¹大酒國である。安在何某氏はもともと好みの酒であり、彼もかなりの飲酒を行う。

「先口つけの一二献は寔に甘露のごとくにて、天の漿と賞翫す、夫れより続て飲ほどに後には酒が酒を飲み、風もなけれどむいき飲み、遂には酒に飲れつつ…」²²ここでも酒が病を発することになると思い知ってそこを去る。そして、巨人のいる「龍伯國」に到着する。「女人國」と「大酒國」を経るということが、養生の主要なテーマである房事と飲食とを示している。その巨人が欠伸をした拍子に、主人公の安在何某はその巨人の口の中に入ってしまう、巨人の唾液とともに胃の中まで行き着く。

広大なる口をひらき大欠をせし拍子に舌の根とも思しき處まで引込ければ…大口に飲みたるぬるま湯は大河の堤を押切て、洪水の漲る如く敷波を打て押来れば、安在氏はこの湯につれ食道の細道を越、胸板の直路はるばると行盡し、腹の都の中焦なる胃の液にこそは月にける²³。

食道は細い道、胸板は直進の道、中焦は都に喩えられている。そして、そのまま飲み込まれ、その仕組みをすれば養生の為にもなるだろうと考え、そのまま腹の中へ入って行く。

大人國の人といへども同じ人間の性を得たる事なれば、人身の機關如何なるものといふ事を熟知せば、養生の後覺是に過ぎたる事あらじと了簡を定め、事の様子を伺ひける²⁴。

そこで男が見るのは、心を君とし、心以外の五臓六腑と檀中²⁵そして耳目口鼻形を十七の官とする、一國の政治システムである。

實や古人も人身は一國の象也といひしに違わず、先人身の内には五臓六腑に檀中を加へ、各掌る職分あり総て来れを十二官と稱す、又耳目口鼻形の五ツを外形の五官と云、内外合して十七官の内、心を一身の主とするゆへ、心君と號し又天君とも申也²⁶

十二の臓腑を官に喩えることは、おそらくは『黄帝内經素問』の靈蘭秘典論から採用されている。『黄帝内經素問』の靈蘭秘典論では十二の臓腑はそれぞれ官吏

にたとえられている(心—君主の官、肺—相傳の官、肝—將軍の官、胆—中正の官、膈中—臣使の官、脾胃—倉廩の官、大腸—伝道の官、小腸—受盛の官、三焦—決瀆の官、膀胱—州都の官)²⁷。この十二の臓腑に耳・目・口・鼻・形の五つを加えたのは、著者安元によると思われる。この五つは近世の養生論においては、慎むべき欲の器官である。例えば、貝原益軒『養生訓』において養生の要諦は、「内慾」を慎むこととされており、欲は養生を阻害するものである²⁸。そして耳・目・口・鼻・形は、養生に害をなすその欲の象徴である。巨人の腹中の国では、君主としての心の能力が未熟ゆえに、目と口の官の薦める美食を過ごすため、食物の溢物が「食積大王と僭號し腹の内裏を奪い」ってしまっている(図2)。そして、食積大王、それと手を組んだ海手山手の悪食と薬²⁹の兵士との戦いが「おながが原」で行われている(図3)。

主人公安在何某は巨人の肛門から外へ出ると、幸いにも蓬萊山に着いていて、そこで仙人から靈剤の巻物を得る。本国にたどり着きそれを開いてみると、「節飲食、遠帷幄、慎起居 右三昧自身調合して一圓となし常に服して怠るべからざる、三種ともに自身の胸中に産ず」³⁰と記されている。飲食を慎むこと、房事を慎むこと、活動や振る舞いを慎むこと、これら三つは自身の心持ちの中にあり、靈薬はこれらの三つの調合によるとされており、それに従って妻とともに長命を得たというところで話は終わる。腹の内の機関を知っても結局のところ、飲食を慎むこと、房事を慎むこと、活動や振る舞いを慎むこと、という従来の典型的な養生法が示されるのである。



図2 『巨富古貴草』(東京国立博物館)
中央部左が「食積大王」、回りにいるのは食物(動物)。



図3 『巨富古貴草』(東京国立博物館)
「おながが原」での戦いの場面。

3 腹の中の人間模様 —十返舎一九(作・画)『腹内養生主論』、かしこ庵『腹内窺機関』—

どちらも文芸作品として有名なものではないが、体内の働きを示しながら食養生を論ずることにもなっている黄表紙である。どちらも五臓六腑が人に見立てられ、ドラマが展開していく。

『腹内養生論』の話のあらましは次ぎの通り。主人公は作者一九自身、「くいたいがやまいなり」の一九は、食べ過ぎが原因で体調が悪い。そのような状況で机に向かうが、うとうととしてしまう。一九は夢の中で自分の口のから腹の内に入る。そこには五臓に見立てられた人物たち、その人物たちの息子や娘、奥方たちの巻き起こす出来事を覗き見る。その出来事は夢なのではあるが、一九は目覚めると同時に嘔吐し、同時に一九の口から得心に見立てられた男が出てきて、飲食の慎みを説く、というものである。

腹の中では、心の臓、その奥方の魂、脾の臓、胃、肺の臓に見立てられた登場人物たちはみな大食に当てられて青ざめている。そして、口(の男)が呼び出され、心の臓から慎むようにと言いわたされている(図4)。

はらのうちをのぞきみれば、心は身の主也と古語にいふごとく。しんのぞうをたいせうとしてひのぞうはいのぞうかんのぞうじんのぞうたいしょくにあてられいづれもいろあをさめ…このくちよくつつしみてどくなるものとりことむよう也といいわたしたる³¹



図4 『腹内養生主論』(国立国会図書館)
左下より時計回りに、口、胃、心、魂、脾、肺。

漢方医学における心は、精神的な機能を持つ。心の奥方が「魂」という設定はここから来ている。腎には娘の「精」がおり、脾の息子の「元気」と、丹田という家の中へ入っていく。漢方医学では腎の中に貯蔵される生命活動の基礎物質を「精」もしくは「精気」という。また腎は五行でいえば水に対応する。腎の娘が「精」で「じんのぞうのむすめとみへてみずたくさんにみづみづしている」とされるのは、ここから来ている。「元気」は、「腎の精気と水穀精微からつくられる生命力を保つために必要な気」³²のこととされる。水穀精微とは「飲食物を消化吸収することにより生じる精気・精華、また気血を生成する源」³³である。飲食に最

も関わる臓腑である脾の息子が「元気」であり、「元気」と腎の娘の「精」が一緒になるというのは、ここから来ている。食が止まないので脾の臓が衰えて怒り、息子の元気を勘当してしまう。「元気」は腎の勘当された娘の「精」と一緒に出て行ってしまう。娘の「精」に出て行かれた腎は弱り病になる。水である腎が弱ったので火が高ぶることになり、腎はますます苦しむ。奥方の魂を失った心の臓に口(の男)がやって来て悪事を進める。腹の内の五臓六腑は口(の男)によって混乱させられる。膀胱や大腸も滞ってしまい、それをなくして欲しいと町人姿の膀胱と大腸と根³⁴が奉行姿の肝に願い出る。漢方医学では、肝の臓は怒りに関わる臓腑である。また前述したように『黄帝内経素問』でも肝は「將軍の官」に喩えられていた。肝の臓が奉行として描かれる理由はこのあたりある³⁵。結局、口はきも玉を喰らわされ打ち負かされる。悪事を働く口(男)は大腸から出て行き、それとともに便が通じ、血気も穏やかになる。「精気」と「元気」もそれぞれ親元の腎と脾のもとに帰り、腹の内はおさまる。ここまでが一九の夢である。言うまでもなく食養生がテーマとなっており、大食で体調を崩したありさまを腹の内の臓腑＝人間模様で描いている。その描き方は、五臓六腑観を反映したものとなっている。

『腹内窺機関』の著者、かしこ庵については不詳である。『腹内養生論』同様、養生が直接的なテーマであり、東山堂の「疝積湯」という薬の宣伝本ともなっている³⁶。人々の尊敬をうける竹庵という真面目な医師は、病根を知りたいという願いで熊野権現に十七日間祈ると、病人の腹の中に入ることが出来るという枕を授かる。熊野権現は、竹庵の夢の中で次ぎように述べる。

なんちにあたうるなりもびやうにんのはらのうちへ入らんとするときはまずあんふくをなしびやうにんねむりにつかばなんちもこの枕をしてともにねむるべし。しかるときはじぜんとふくちうへ入りそのびやうこんをさぐらん事ころのままなるべし³⁷

ここでも睡眠中、夢の中で腹の中へ入っていくことになるのである。「あんふく」とは按腹つまり按摩・マッサージのことである。竹庵は喜んで枕をたずさえ、女の大病の積、男の大病の疝の病根を探ろうと病家へ行く。按腹を行い病人が寝入り、竹庵も枕を使って眠る。竹庵は病人の口から旅支度の姿で入って行く。(図5)

せんしやくのわづらひあるひはさしこみくだりはらしのひきつりせんきのつりいと百ひろみちのめいしよきうせきこうものぬけあな…ひるの中へたしたれば

ぬまやかはやら…ようようとたどりつきて³⁸

腹の中は地理的空間であり、腹の内を知る事は旅の見聞とあい通じる。竹庵の旅支度の姿はそれを意味している。竹庵は「疝積痛之助領分」の杭の指示に従って下っていく。すると竹庵は、「せんしやく」の男を「げどく」が押さえ、「かんしゃく」の男を「くまのい丸」と「だらすけ」が押さえしている大げんかの場面と、「いたみの主」が奥方と腰元を脇において座している場面に立ちあう。「せんしやく」の男を「げどく」が押さえ、「かんしゃく」の男を「くまのい丸」と「だらすけ」が押さえいているというこの図は、「解毒」、「熊の胃丸」そして「陀羅尼助」といったよく知られた薬も、「疝積」を押さえることしかできないと示していると思われる(図6)。最後に「せんしやく湯」率いる一群と「いたみの主」の家来との戦いの場面に立ち会う。痛みの主の家来は、信州上田の東山堂の「せんしやく湯」が責めてきたとおびえ、そして城を明け渡して退散する。ここで竹庵の夢が覚める。そして、疝積湯を用いて試みるとほとんど病を治すことができ、竹庵は金銀も入って豊かになる。



図5 『腹内窺機関』(国立国会図書館)
旅の姿で竹庵は腹の中へ入っていく。



図6 『腹内窺機関』(国立国会図書館)「かんしゃく」を「だらすけ」と「くまのい丸」が押さえ、「せんしやく」を「げどく」が押さえいている。

4 腹の中の近代化—福永美智篇『身體衛生第一の心得』—

『巨登富貴草』は、腹の内の機関を知っても従来の養生法に従う他はないという落ちがあった。これより半世紀を経た山東京山作『無病長寿養生心得草』(安政五年)では、腹の中の仕組みを知ることが養生には必要である、という立場を取る。その内容は、飲食や起居といった従来の養生法に加えて、解剖学や産婦人科的な内容が盛り込まれるとともに、まじないなどの習俗も紹介されている³⁹。近世の養生論の中に解剖学の知識が直接的に記述され始めるのは、山下玄門『養生新語』だと思われる。三巻から構成される山下玄門『養生新語』は、上下巻において身体各部の説明を「字義」「和訓」「相法」「解体」「養生」から説明しており、基本的には漢方医学に基づく養生論が展開されているが、甚だ簡略化されているものの解剖図が掲載され、中国古典の医書と同時に『解体新書』の引用もある⁴⁰。『養生新語』と同時期の養生論は、西洋医学の知識ではない旧来の気の流れや道徳的な身の処し方を説く場合が多い。京山は次のように述べて、解剖学的な知識を語っていく。

古人の版本にのこりたる、養生の書あまたあれど、腹の内の機関を書加へたる書、一部もなし。京山おもふに、養生するにはまづ第一に、腹の中のことを知らずんば、あるべからず…養生をする人の心得の為に、腹のなかのからくりをくはしく記すこと、左のごとし⁴¹。

養生書である『無病長寿養生手引草』においては、体内を一国あるいは一都市に喩えるということが明示されているが、体内全体が一国あるいは一都市であるという前提に立ち、身体各部の説明が展開される。口は関門に喩えられた上で、食養生が説かれる。

口は飲食腹に入る関門也。関守疎なれば、悪僕まぎれ入りて、国の災となるがごとく。人の食傷するは、口の関守がおろかにて、…口の関門厳ならざる故也⁴²。

「心の臓」の機能は、絵をつけて玉川上水に喩えられている(図7)。身体は江戸という一都市であるという前提が、特に説明を要することなく通じるのである。

肺の臓の引息に、天地の気を通はす力によりて、心の臓が強たり縮みたりして、動血静血の二管より緒筋へ血をかよはし、皮肉を潤し養ふこと、玉川上水が、あまたの井戸へ水を通わすごとし⁴³。

『無病長命養生手引草』は、迷信なども記述されており通俗的ではあるが、それまでの養生論から比較すれば、解剖学的な知識を多く記述している。例えば「骨

の大柱」という表現で脊椎を説明し、「人の生きてゐる根本は、頭なるゆゑ、魂も頭にあり。魂につきまといふ神気も、頭にあり」とし、頭部を精神的作用の箇所として最重要としている。かつて腑分けを示した山脇東洋の『蔵志』(一七五九)の解剖図に頭部はなかった。五臓六腑を観確認するには、頭部は必要なかったのであり、切り開かれるのは胴体部分であった。『解体新書』には巻二の冒頭に「夫頭者圓居一身之上意識府也」として頭部が「意識の府」であるという記述がある。しかし、日常生活のレベルでの養生や衛生を説く読み物の中で、頭や脳が最重要とされることは、山東京山『無病長寿養生手引草』(一八五八)以降かと思われる。



図7 『無病長寿養生手引草』(国立国会図書館)
心の臓を玉川上水にたとえている。

『無病長寿養生手引草』は、二、三節で取り上げた『巨登富貴草』、『腹内養生論』そして『腹之内窺機関』ほど、腹の内を覗く、腹の内を巡る、という体内への関心が明確なものでなかったが、明治十八に出版された福永美智編『身体衛生第一の心得』は、身体内部を覗き巡っていくことを全面的に展開している。臓腑は何かしらのものに見立てられ、身体内部は地理的空間と捉えられている。ただし、そこでなされる説明は、解剖学的な臓器把握であり、見立てられるのは新しい政治システムである。『身体衛生第一の心得』の編者福永美智については、三重県出身という以外是不詳である。『身体衛生第一の心得』は全体一〇三頁、このうち五八頁分が夢の中で体内を巡っていく「体内道中記録」にあてられている。衛生学的な知識を平易な言葉で解説するものである。附録として「安楽長壽圖」という夫婦和合や忠孝を説き、通俗道徳的な内容の川柳形式の「養生心得」を付けていることは、近世の養生論の内容と変わらない。「体内道中記録」では、山人がうたた寝の夢の中で、その親友穿鑿子と共に、穿鑿子の解説に従って、体内を巡り体内の構造を知っていくという内容である。洒落混じりの文章や山東京山『腹中名所図会』に登場してくる一心大明神に言及するなど、黄表紙から着想を得ていると思われる。夢の中で体内に入るという展開は、前節でみたように、体内へ入る

というあり得ない状況を可能にするためのものである。山人という名前で、衛生学を知らない啓蒙されるべき人物と設定されていることが分かる。また「生博識の穿鑿子」という設定も、身体内部を探る、つまり穿鑿することを示している。

まず、山人と穿鑿子は「鬚髯が原」の「鼻下城の大門口」から入って行く。この場面は山東京伝『腹内名所図会』から借りてきていると思われる。ここでも体内は地理的空間である。例えば、唇を「上下に開閉する構造の扉」、舌を「舌本官という頭目」、歯を「歯牙將軍」、食道を「食道隧道」、十二指腸を「隔肉道」、胸部を「胸前駅」、胃を「倉廩の官」、小腸を「小腸洞」、大腸を「大腸洞」としている。山人と穿鑿子は、口から入り、舌や歯をも擬人化し大腸洞まで巡ってゆく。この行程は飲食を第一のテーマとする近世以来の養生観に従ったものではある。

体内は、その解剖学的な説明が明治政府の政治システムに喩えられていく。さらに、漢方医学的な五臓六腑から解剖学的な臓器理解への移行が解説されていく。例として、胸についての記述を見てみよう。

このじやくは往昔全国の議政院ありし地にて何が事ある時は必ず先此に手を安て思慮分別することなれば国内最も緊要の場所に於て其廣きと狭きとに因て人の品格をも定る位なりしが物換り星遷りて今は之を首府脳髓に移して物換り星遷りて今は繁花遺滅じたりとはいへども⁴⁴

漢方医学の五臓六腑における心は、血脈をつかさどり精神的作用の機能をもつものである。胸は、その心の機能の場所である。しかし、解剖学的な心臓の把握では、そこに精神的作用をみることはない。精神的作用の場所は脳である。「物換り星遷りて今は之を首府脳髓に移して」という表現は、五臓六腑観から解剖学的な身体把握への移行を語っている。『無病長生養生心得草』は頭や脳を最重要と記述した最初の通俗的養生論と思われるが、『身體衛生第一の心得』ではさらに詳しく説かれている。人は一国であり、脳髓はその「全国中最大切の土地」である。「脳髓府」は、立法行政司法という政治システムになぞらえられている。

本府は人身の萬機を主宰する政廳の在る所にして全国中最大切の土地なれば外廓は総て骨を以て包み其上毛髪を植て之を護り…脳髓政廳は感受性才智。知識性才智。考慮性才智の三大部を持って組織て百司庶僚之に属す恰も普通國々政府の立法行政司法の三大部より成立が如し。⁴⁵

山人と穿鑿子はさらに政廳へ入り、その組織の構造を知る(図8)。多くの身体内部の解剖学的な構造に感

心する。うたた寝の夢を「頗る裨益なる所」とし、萬物の霊たる責任にそむくことなく勤めようと思ひ直すところで、話は終わる。

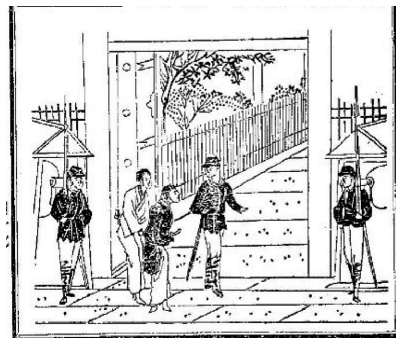


図8 『身體衛生第一の心得』(国立国会図書館蔵)
脳を表す挿絵。山人と穿鑿子は脳髓の府に入る。

結び

多紀安元(藍溪)『巨富貴草』は、解剖で体内を知ることには否定的で冷やかな態度であった。黄表紙の十返舎一九『腹内養生主論』、かしこ庵『腹内窺機関』は、解剖そのものを扱うことなく、病を引き起している腹内の内部のありさまを臓腑に見立てた人々で描いた。近世末期の『無病長寿養生手引草』では解剖の知識を養生のために必要ととらえ、『身體衛生第一の心得』は、近代日本の政治システムに喩えながら体内を説明した。

本稿でとりあげた読み物のうち養生書である山東京山『無病長寿養生心得草』以外の、多紀安元(藍溪)『巨富貴草』、十返舎一九(作・画)『腹内養生論』、かしこ庵『腹内窺機関』、福永美智篇『身體衛生第一の心得』は、その体内の描写は、夢の中という設定であった。

『巨富貴草』の主人公、安在何某は枕元の掛け軸から出てきた飛行船「ゆうくとふろうと」に乗り「龍伯国」にいき、巨人の欠伸とともに巨人の体内に入った。『腹内養生論』では一九の体調不良時のうたた寝の夢という設定であり、『腹内窺機関』でも医者竹齊の夢の中の出来事であった。物理的に不可能な体内へ入るには、夢という設定が必要であった。腹の内を覗くことは、他人には不可視なものを自分のみが目に見ることができるといふ欲望、隠された「心の内」を知るといふ欲望を満たすものであった。

体内を一国、一都市の相似と捉えることの淵源は、身体がマクロコスモスに対するミクロコスモスと捉えられる、天人相関説にいきつく。天も地も人も同じ気の生成物という発想は、月や太陽、風や水といった自然環境と人とを連続的に捉える。人の身体は天地や自然環境と相似的に捉えられ、そうした身体把握の日本における近世的展開ともいふべきものが、家や都市と人とを相似に捉えることであった。また、解剖学による身体把握という未知の分野は、見知らない土地を巡

り理解することにも喩えられていた。つまり、一国や一都市に喩えられる体内を知ること、新しいことの発見という意味でも、旅と通じるものなのであった。またそこに十八世紀以来の旅の流行も加わっていた。

注

- 1 酒井シズ「日本最初の西洋解剖書の翻訳」(森三信編『日本で初めて翻訳した解剖書』六代原三信蘭方医三百年記念奨学会、一九九五、八三頁。)
- 2 以下に列举しておく。举行年、主要人物、場所の順である。
一七五四(宝暦四)年、山脇東洋、京都
一七五八(宝暦八)年、栗山孝庵、萩
一七五八(宝暦八)年、伊良子光顕、伏見
一七五九(宝暦九)年、栗山孝庵、萩
一七六五(明和二)年、平壺賀甲叔、不明
一七六九(明和六)年、半井彦ら、福井
一七七〇(明和七年)年、河口信任、京都
一七七二(明和八)年、杉田玄白ら、江戸
一七七二(明和八)年、山脇東門ら、京都
一七七三(安永二)年、麻田剛立、大阪
一七七四(安永四)年、山脇東門、京都
一七七五(安永五)年、石氏初鹿ら、甲州
一七七五(安永五)年、山脇東門、京都
一七八三(天明三)年、橘南谿ら、伏見、
一七八七(天明七)年、栗山玄厚、萩
- 3 タイモン・スクリーチ『江戸の身体を開く』作品社、一九九七、一九六-一九九頁。高山宏『黒に染める』作品社、一九九七、十九頁。酒井シズ『絵で読む 江戸の病と養生』講談社、二〇〇三、一三八-一四三頁、白杉悦雄「江戸の体内想像図―「飲食養生鑑」と「房事養生鑑」―」『解剖誌』八一号、二〇〇六、十九-二二頁。拙稿「近世後期における体内イメージ二つの「養生鑑」を中心に―」『学芸』六十号、二〇一四、四一-五〇頁。
- 4 どちらも内藤記念薬博物館蔵。
- 5 スクリーチ、前掲書、『江戸の身体を開く』作品社、一九九七。
- 6 スクリーチ(田中、高山訳)『大江戸視覚革命』作品社、一九九八(T. Screech, The Scientific Gaze of and Popular Imagery in Later Edo Japan : the Lens within the Heart, New York : Cambridge university press, 1996.)
- 7 白杉悦雄「江戸の体内想像図―「飲食養生鑑」と「房事養生鑑」―」『解剖学』八一号、二〇〇六、十九-二二頁。
- 8 『江戸学事典』弘文堂、一九九四、四四四頁。
- 9 副田一穂「江戸時代の望遠鏡と拡張された視覚の絵画化」『研究紀要』二〇号、二〇一三、二五-五二頁。
- 10 板坂俊一『江戸期視覚文化の創造と歴史的展開』三弥井書店、二〇一二。ここで板坂がいう<のぞきからくり>は、レンズの有無は関係なく、箱の中の劇場を覗き見る装置、眼鏡細工のこと。
- 11 同書、一一六頁。
- 12 高橋陽一『近世旅行史の研究』清文堂、二〇一六、六十一-六十二頁。
- 13 瀧澤利行は、『巨登富貴草』を「養生を庶民にしたしみやすい形で説いたものに、物語形式がある。」として紹介している。瀧澤利行『養生の楽しみ』大修館書店、二〇〇一、三十頁。
- 14 佐野安貞『非蔵志』(宝暦十)三丁。(国立国会図書館)。筆者が漢文を書き下し文にあらためている。
- 15 同書、四丁。(国立国会図書館)。
- 16 杉田玄白『養生七不可』の七つの項目は、次の通りである。「昨日非不可悔恨」、「明日是不可慮念」、「飲興食不可過度」、「非正物不可苟食」、「無事時不可服薬」、「頼壯実不可過房」、「勤動作不可好安」(早稲田大学図書館古典籍総合データベース)
- 17 タイモン・スクリーチ『江戸の身体を開く』作品社、一九九七、二八〇-二八一頁。
- 18 多紀藍蹊『巨登富貴草』(三宅秀・大沢謙二編『日本衛生文庫第三輯』大空社、一九七九、七-八頁。)
- 19 同書、(三宅秀・大沢謙二編『日本衛生文庫第三輯』大空社、一九七九、九頁。)
- 20 同書(三宅秀・大沢謙二編『日本衛生文庫第三輯』大空社、一九七九)。
- 21 同書、(三宅秀・大沢謙二編『日本衛生文庫第三輯』大空社、一九七九、十一頁。)
- 22 同書、(三宅秀・大沢謙二編『日本衛生文庫第三輯』大空社、一九七九、十一-十二頁。)
- 23 同書(三宅秀・大沢謙二編『日本衛生文庫第三輯』大空社、一九七九、十七頁)。
- 24 同書(三宅秀・大沢謙二編『日本衛生文庫第三輯』大空社、一九七九、十七頁)。
- 25 この場合は心包・心包絡のことを指している。
- 26 多紀、前掲書(三宅秀・大沢謙二編『日本衛生文庫第三輯』大空社、一九七九、十七頁)。
- 27 『現代語訳 黄帝内経素問』「靈蘭秘典論篇 第八」東洋学術出版社、一九九一、一六一頁。
- 28 貝原益軒『養生訓』正徳三、特に卷之一総論に内慾の記述がある。
- 29 大黃(だいおうの根)、大戟(とうだい草の根)、甘遂(なつとうだい草の根)、郁李仁(にわうめの果実の核)などの生薬。
- 30 多紀、前掲書(三宅秀・大沢謙二編『日本衛生文庫第三輯』大空社、一九七九、三一頁)。
- 31 十返舎一九『腹内養生論』二-三丁(国立国会図書館)
- 32 辰巳洋編『中医用語辞典』源草社、二〇〇九、七四頁。
- 33 同書、一四〇頁。
- 34 根とは、生命活動の基本のことで、先天の本のこと。同書、八八頁。
- 35 錦絵「飲食養生鑑」でも肝は奉行として絵が描かれている。
- 36 東山堂については信州の薬問屋である、詳細は不明。東山堂の絵は歌川直政と歌川貞房による浮世絵がある。それらにも「せんきの妙薬」という看板が中心的に描かれており、文

- 字通り看板商品だったと思われる。中川五郎左衛門編『江戸買物独案内』(文政七年)には東山堂は掲載されていない。
- 37 かしこ庵作・『腹内窺機関』七丁。(国立国会図書館)
- 38 同上。
- 39 桜井由畿は、本井了承『長命衛生論』(一八一二)、辻慶応儀『養生女の子算』(一八三三)と比較した上で、解題として次のように述べている。「本書が前二書と比して優れているのは、儒学の観念論から自立して、具体的・科学的に人間の身体の働きや長寿健康を分析していることである。」(『江戸時代女性文庫43』大空社、二〇〇六、「解題」四頁。)
- 40 『養生辨後編』(日本衛生文庫第四輯)
- 41 山東京山著、安藤広重画『無病長寿養生手引草』(国立国会図書館)
- 42 同書、(『江戸時代女性文庫43』大空社、一九九六、)
- 43 同書、(『江戸時代女性文庫43』大空社、一九九六、)
- 44 『衛生第一の心得』六-七頁。(国立国会図書館)
- 45 同上、十一頁。(国立国会図書館)